ありが隊新聞

2018年8月30日
Vol.65
編集：西野明花

はじめまして

文：前田 美沙

8月1日から新しく地域おこし協力隊に加入させて頂きました。前田美沙（まえだみさ）と申します。

まだ天龍村に来たばかりでお会いできていない方のほうが多いので、この場を借りて少し自己紹介をさせていただければと思います。

まず出身ですが、富山県富山市の田舎町です。「立山仰ぐ特等席」というキャッチフレーズのつく、その名の通り立山の裾野です。基本的に田んぼしかない 隣の家まで500m離れてる。」という感じのだだっ広い町です。

「富山の高校卒業後は長野県上田市の専門学校に通って、卒業後もずっと小諸市や軽井沢などの東信地方で暮らしていたので、長野歴はもう9年くらいでしょうか。

前職はずっと農業に携わって野菜作りをしていました。レタス・キャベツなどの葉物やズッキーニなどの高原野菜を中心に色々作っていて、農家歴は6年くらいです。10キロ15キロあるキャベツや白菜の段ボールを積み込みで放り投げたりしていたので、すっかり腕周りが逞しくなってしまったのが悩みです。女の子の華奢な腕に憧れます。

とじしろ

冬の間は長野で農業ができなかったので、休暇もかねて沖縄のヤンバル地方の田舎で農家さんについて住み込みのアルバイトしたりしていました。そこのお父さんがすごく多彩で豪快な方で、3万坪の山を切り開き、全てバナナやウコン畑にして真ん中に大きな溜池をつくり、自分で家を建てお母さんと住んでいる、自分で何でもやっちゃうその近辺では有名な伝説の男でした。

面白かったのがトラクターももう動かないレベルに壊れているものを直して使っていたので、エンジンは剥き出し、椅子は台風で飛んでったからとパイプ椅子を突っ込んであって、セルモーターが動かないので常に急な坂に停めてあって下りながら押し掛けするという仕様でした。

面白すぎる！と思ったと同時に、それ以上に尊敬の念と何でも自分で対応できることへの憧れのようなものがすごく湧いてきました。

現代は壊れたら直ぐに買い替えたり新しいものが出たら乗り換えるのが普通の感覚になっている事に気づきました。

他にも近くの鶏舎のおじさんが月に一度鶏を持ってきてシメ方と解体を習ったり、ウリボーをお父さんが捕まえてきて黒豚と交配させたり他ではできない体験を色々させてもらいました。農業をしながらのそんな生活の中で一番衝撃だったのは、沖縄農業の過酷さでした。まず土質が酷く、北部は赤土の強酸性、そのままでは野菜は何も作れない。南部は強アルカリでほうれん草くらいしか育たない。

水も川がほとんどなくて地下水をつかっている所が多いので決して綺麗なものではありませんでした。近隣の堆肥の成分が流れ込んでくるので、純粋な水とは呼べない所も多いです。

ずっと長野で農業をしてきて、大きな手を加えなくても使える良質な土の畑と、山から流れてくる澄んだ水をふつうのものだと思っていた自分を、すごく反省しました。そこで改めて、長野の恵まれた資源と環境に気が付いて、感謝しました。

天龍村に来たきっかけは、沖縄のお父さんが「鹿を仕留めてみたい」と言ったのと、畑だけでなく山のこと（狩猟、林業）も深く知りたい。と思い始めたのがきっかけです。そんな時に、協力隊の募集を見つけました。

まだ来て間もないですが、天龍村の方々の知識とパワーに本当に驚いていて、習いたいことが次から次へとでてきて圧倒されています。

できる限り沢山の方とお話できたらと思っています。多業を学べる環境で天龍村でしかできないことが沢山あるので、吸収して活かしていけたらと思っています。

今年度の目標「暮らしの体制を整える」

文：西野明花

隊としての今年度の目標について、私の考える 暮らしの体制を整える」の主語は私自身です。大好きな天龍村この先もずっと残るために、ある程度の人口が必要です。私が天龍村に初めて来たときは1，500人ほどの人口がいましたが、4年たった今では1，300人を切ってしまいそうです。そのためにも、I・Uターンが天龍村の暮らしもいいなと思える環境づくりが大切だと考えます。私は、ここの人の温かさや、つながりを感じることができる瞬間が多いこと、小さい子からお年寄りまでがいきいき生きている姿がとても好きで、一緒に暮らしたいと思い、移住しました。

私の活動は、私自身の経験が大きく。『なぜに暮らす数日」をきっかけに村を好きになったので、外から来るきっかけ作りと、地域の人と関わる場に多く参加させていただいたので、集まれるきっかけをつくれたらいいなと思い活動しています。

先月来村した国際基督教大学のサービスラーニングの受入れも、天龍村を知ってもらう大事な瞬間に係ることができるため、小柳隊員から引き継ぎ担当させていただきました。

4泊5日の主な活動は、村の歴史勉強会・坂部地区でのお祭りや伝統継承についての見学・地区の方との交流・プール清掃・ホームステイでした。宿泊は、毎年お世話になっているおきよめの郷と3年目にして初めての左閑辺屋にお世話になりました。

坂部地区に入り込んでの体験を通して、地区の方と深い交流ができました。また、学生自身が育ってきた地域紹介のプレゼンもあり、お互いの大切なもの・地域らしさを感じれたのではないかと思いました。

ホームステイは1泊ととても短い時間ではありましたが、ここでのリアルな暮らしを体験していただいたり、家族とのお話の時間・体験の時間で学生自身とても思い出に残っていました。

私は天龍村を満喫するには、地域の人と実際に関わることだと感じています。体験期間中たくさんの村の方に会いし、人の温かさを感じてもらえたのではないかと思います。たくさんのご協力をいただき本当にありがとうございました。

今回の滞在中新たなつながりも作っていただいたり、今後もより良い関係性になるようにつなげていきたいと思います。

7月20日（金）～24日（火）
学生12名教員3名

今月の随筆

文：上野　真純

（ずいひつとは、心に浮かんだ事、見聞きしたことなどを筆にまかせて書いた文章のことです。）

暑いですね。

最近印象に残った言葉を書きます。

夢や希望、目標や目的持つのはいいことだが、そこに具体的かつ現実的な計画を立てないと実現しない。

大事なのは情報と計画と行動力。

些細なことへの感謝を忘れない。些細な不愉快は気にしない。

時間がないのではなく、やる気がないだけ。

考える順番を間違えると答えにたどり着かないことがある。

人と肩がぶつかるような人に幸運はやってこない。

自分を低く評価する必要はない。

イライラする人は自分でイライラすることを探している。楽しく生きている人は自分で楽しいことを見つけ、自分で楽しいことを作っている。

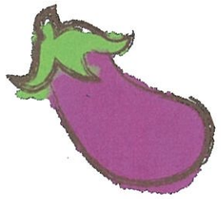
今日は「これが幸運だった」と一つでも見つけられる人には明日も幸運があるもの。

人生はどうやって楽しく生きるのかが大切。「楽しい」と「怠ける」は違う。真面目に生きる必要はない。楽しく生きればいい。

何をしている時が楽しいのか、それを見つければいいだけ。怠けてはいけない。

心に余裕がないと視野が狭くなる。心の余裕やゆとりは大切。

相手の言い方が悪いからといって大事なことを聞かないのは己に問題がある。自分で変換して噛みしめ吸収することが大事。なんでも柔らかいからいいのではなく、固くても吸収しにくくても大事なことはたくさんある。



ていざなす出荷　文:柴田　大輔

こんにちは。暑い日が続いていますね。7月の中旬からていざなすの出荷がスタートしました。私も今年から少しづつ出荷作業に参加しています。去年は共選場になすを持って行ってなかったので2年目にして初です。収穫はまだ始まったばかりなのでどんどん収穫していきます。

また、8月18日(土)19日(日)で福島県の伊達市に物品販売でていざなすを売りました。福島県にていざなすを持って行ったのは自分が初めてだと思います。なすを試食してもらって美味しいやら不思議やらいろんな感想を聞き、これからの参考になりました。

20日(月)は長野大学の学生が来村しました。協力隊1人1人が半日づつインタビューを受けて、天龍村での仕事・生活で感じたことなどを学生にありのまま伝えました。インタビューが学生にとって良い材料になってくれたらと思います。

初出荷！(自分のていざなす。)

自宅でたこ焼きパーティー！

休日に和知野で遊びました。

活動報告8月

今月は、和知野川キャンプ場の手伝いをさせていただきました。和知野川キャンプ場は、村外からの人を集客できる貴重な観光資源です。透き通った清流とテント1張り1，000円という安さから、お盆の時期は多くの人が訪れます。

日帰りで川遊びに来る方、泊まりでキャンプを楽しみに来る方の両方から評判が良く、そのような恵まれた観光資源の現場を見ておきたい思いが前々からありました。また、天龍村の夏を体験するのは初めてなので、夏は何をして過ごすのかを知るいい機会でした。

実際に手伝いをして感じたのは、和知野川キャンプ場は県外から集客できるほどの魅力があるということを強く感じました。そう感じたのは、遊びに来る人達が大阪や京都の関西圏であったり、東京や神奈川の関東圏といった遠くから来ていたからです。村外にそれほど周知していないにも関わらず、都会から訪れる人がいるということが、天龍村の貴重な観光資源になっていることを証明しています。

キャンプ場の一番忙しい時期に手伝いをしたことで気づけたことは、とても貴重なものとなりました。(添田)

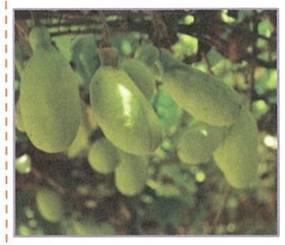
お盆期間中は売店もやっています！

ゆらゆら変遷記～天龍村Ver.～【初瀬健太】

天龍村に来て半年が過ぎました。加速度的に月日が経つのを早く感じてきたこれまでの日々です。8月に入り気持ちが落ち着ける程度のゆとりが出てきたので、本を読んだり、秋野菜や秋の仕事のことを考えたり、さらに来年以降どういう方向に向かって行こうかなとぼんやり考え始めています。いくつかチャレンジしたいこともありますし、今年と全く同じことをする気はないので、稲刈りが終わるまでには今年の反省を踏まえて、次の段階へ進むための計画を立てていければと思っています。

8月10日に大河内の田んぼが出穂しました。田植えからちょうど70日です。やっとここまできたなっという思いです。自然の摂理に従って、勝手に成長していくので、自分が育ててきたという実感が沸かないというのが本音ですが、だからこそそこに難しさと面白さを感じます。気持ち的には成長の助けをしてあげているだけのような感じです。稲刈りまで約50日ほどですが、おそらくこのまま何事もなくゴールまでたどり着くことはないだろうと思っているので、できる限りの手助けをしていきたいですね。

最後に1つお知らせです。8月、9月の週末(9月8.9日を除く)と8月21日は星野リゾート リゾナーレ八ヶ岳で、おあがりての野近・宍戸か初瀬が物販をしています。また9月15～17日は初瀬が泰阜村室内ゲートボール場でも物販を行うので、ぜひ遊びにきてくださーい！



こんにちは。
地域おこし協力隊の本多紗智です

この記事を書いているのは８月８日。
昨日８月７日～今日８日にかけて、二十四節気のひとつ【立秋】に入りました。
急激に朝晩の気候が下がり、心なしか吹く風も秋めいてきたような気がします。
昨夜は待ちに待った雨がやってきて、雨の匂いと水の滴る音がとても心地よかったです。

季節感や自然の匂いが当たり前に感じられない人工都市で生活している時には受け取る事の出来なかった、四季の移り変わりの微妙なサインをダイレクトに感じ取る事ができるのが、山暮らしのいいところの一つかもしれません。

先日、収穫した夏野菜をイベントで販売させていただく機会をいただきました。私は出張に出ていたので委託と言う形ではありましたが、どんな野菜が売れたのか・売れなかったのか、お客さんはどんな反応で、何を言っていたのか…人伝ではありますが、目に見える形で結果や反応が返ってくるのはモチベーションの維持に繋がるということを実感しました。

岡山県への出張講座受講も、はや３回目を迎えました。今回は森林と人間の繋がりを学ぶ中で、過去の日本人がどのように森と繋がり、生きる為に必要な資源を調達し、未来からの借り物という
大きな視野で管理し、共に生きてきたのかを知ると同時に、経済効率の名のもとに人間と分断された森がどのような過程を経て「木の畑」と呼ばれるまでに荒廃し、光の当たらない場所となっていったのかを知りました。

今でこそ農業に興味を持つ人は増えていますが、林業は農業よりも遠い世界の話だと思う人が多いと思います。しかし日本人の森との付き合い方を過去から学ぶことによって、林業は今よりずっと生活に身近な存在になるのだと思います。

私自身も、林業と聞いてイメージするようなダイナミックな世界ではなくとも、日常生活の中で少しでも森に関われるような暮らしをしていけたらいいなと感じています。日本の森の多様性は群を抜いて世界で一番であり、森林の荒廃化を止めるには、まず人間が森に入る事。これが一番基本で一番大事なことだそうです。